

英国における作文教科書についての考察

——“Write away”の場合——

木下 紀美子

一、はじめに

一九五〇年以降、自己表現としての創造的作文を重視してきている英国の作文教育では、基礎となる原理が常に問われるとともに、実際の学習指導は、個々の学習者の興味や必要に応じて方法が生まれ、多様な展開がなされるよう、様々なアイデアや工夫が試みられている。

表現学習の場合は特に、学習者の興味や意欲を喚起し主体的に学習活動に取り組ませることが、指導者の第一の責務となる。しかし、そのためだけの、指導者の単なる思いつきや断片的の方法のみでは、学習者に表現力や方法を真に身につけさせることは困難である。多様な学習者の実態に応じ、それぞれを独自の表現者として伸ばし育てていく一連の学習指導には、一つの体系だった見通しが必要になってくる。

そこで、本稿では、英国の小学校における創造的作文への段階的課程として作られた教科書の1冊“Write away 1” Stage 1~4 (Robert J. Hoare, 1969, 1971 <3冊>, Langman Group)を中心に、その実際からどのような体系が想定できるか、また、作文の教材はいかなる意義・役割を持つのかを考察したい。

二、“Write away 1”の性格と方針

—視覚とことばから想像力の訓練—

この教科書の「序文」では、まず、「子供たちが生き生きと、しかもごく自然に自分の考えや気持ちを述べるように」なるためには、「子供たちの興味と想像力」とを刺激することにあり、と指摘されている。この考え方は、この教科書編者の独自の見解というよりは、一九五〇年以来、作文学習の最大の難関が学習者個々の発想段階にあると言われるようになってから、英国の作文教師たちからも苦心している点であり、創造的作文に取り組む実践者・理論家に共通した基本の考えである。

このような共通見解に基づいて、「この本は、生徒の個人的な反応のために、視覚とことばからの刺激を描いた、三〇の練習を用意している」。三〇という「練習の数は、教師に機会を与えるために、学年（年間授業）で週一回ずつよりは少なめに設けられている。残りの週は、学校での日々の出来事や、他の手段——蓄音機のレコード、テープ、ラジオ、テレビジョン、フィルム——により用意される材料、あるいは、直接に触知できることや、感覚上の経験に基づく類似の練習に導かれる」計画である。

ちょうど絵本の一画面ことが独立し、多種多様な三〇場面(練習)から一冊(一段階)ができている仕組になつてゐる。そこには、見出し(目次)もねらい(目標)も記されてなければ、番号さえ付けられてはない。

ページをめくると、まず、見開きいっぱい(の絵(または写真))が目に入り、文字はその場面の一つの構成部分にすぎない。しかし、絵からの最初の印象が落ち着くと、その文字群がことばとして機能しはじめ、絵とはまた違った刺激を読み手(学習者)に与え、読み手は、改めて絵を見直しつつ、自分の中に生まれ繰り広げられていくものをことばにかえ、指示に従つて表わすという手順になつてゐる。

画面に記されていることば(文章)には、二種類の役割があり、前半では、その場面への着眼のしかた、あるいは、絵と相補いつつ、想像を発展させるような刺激を与え、少し行間をおいたり文字の色を変えたりして後半では、学習者が表現する内容を実際にことばにし文章として綴っていく際の具体的な手順を示している。

学習者は、次々と現われる新しい画面に興味を持って指示されたとおりやうに、表現過程に必要な方法や力を習得し一冊(一段階)を終えることになる。

子供の発達段階における時期(ことに文字への導入期)に、絵や映像の助けを借りつつ、ことば表現に習熟させていくという試みは、従来、日本でもなされてゐる。けれども、この教科書の場合、学習者の発達段階への配慮という以上に、様々な絵や写真を積極的に活用し学習者各自の想像をかきたてながら、絵では表わしきれな

いイメージや思いや考えをことば(文章)で表現させ展開させようと思つてゐると考えられる。

一年間ではほぼ一冊(一段階)というめで三〇の基礎「練習」の場が設けられ、第一段階から第四段階まで、学習者は、四年間かけて、少くとも一二〇回の書く経験をすることになる。この一二〇回は、想像力の訓練の場であるとも考えることができる。書く前提として、まずは、絵(対象)全体から直観するものと、次いで響きリズムと意味を持つたことばから想起されてくるものとを重ね合わせることで、学習者が心の中にまとまつたイメージを形成していく過程を何より大事にして教材化しようとしてゐるのである。

三、第一段階から第四段階までの題材とねらい

第一段階から第四段階まで各々三〇、計一二〇の「練習」の内容をとらえるために、それぞれの「練習」に採り上げられている題材を、場ごとに、絵とことばとから調べ、できるだけ簡単なことばにすると、別表のようになる。さらに、その題材で何を書かせようとしてゐるかを大きく四分類(A・B・C・D)してみた。

A、生き物 B、場面 C、物語 D、感想・意見・思索

A、には、動物の生態をとらえるもの(a)と、人物に焦点をあてるもの(b)とが含まれる。B、は、一つの場面をとらえ描写するものを中心だが、この「場面」には、生活の中からとられてくるものと物語の中からのものがある(a)。それらに加え、自然の情景(一つの事物・事象(b)や特に物音(c)に着眼するものがある。C、「物語」では、与えられた「場面」の続きを「出来事・

事件」への発展として予想して書かせるものから、ストーリーとして展開・終結させるもの（それも、日常生活を取り扱った物語もあれば、歴史物語、冒険ものに推理もの、SFやファンタジー、その他、と実に多彩である）まで幅広くある。D、は、他の題材に付随して思いや考えを述べる程度のものから、まとまった意見や思索を一個の作品として仕上げるものまで入っている。

A、の中、「動物」が、第一・二段階に多く、第三・四段階で減っていくのに対し、「人物」は、逆傾向にある。B、とC、は、各段階とも量的には、ほぼ同じであるが、質的に変わっていく。D、は、第一・二段階では、他のことをとりあげる際に付け加える感想が多く、第三・四段階では、かなり概念的抽象的または社会的な問題をとりあげ、「私」の立場からとらえ、論理的に考えをまとめて表現するよう意図したものになってくる。中でも、第二段階から第三段階にかけて、例えば、「秋」を題材としても、第二段階第五練習（第二⑤）と第三段階第七練習（第三⑦）のように、一般的印象的（感覺的）にとらえていたものから、「私にとつての」という視点（立場）を明示しその理由や根拠を述べる個別的（論理的）なとらえかたに転換していく点は、思考・表現の発達段階を考えるのに特に注目したい。

それでは、A、Dのそれぞれについて述べていく。

A、(a) 「動物」を中心とするもの

「動物」は、子供の興味をひきやすい題材であるためか、第一、二、三段階では、最初の練習題材にあげられている。

第一①①では、画面いっぱい青地に白色で蜘蛛の巣と右手上方より獲物を見つけてはい降りてくる大きな蜘蛛と左手下方に網に捕らえられた小さな蜘蛛とが描かれ、黒で次のようなことが与えられる。

一匹のくもがいる

壁の上をはっている。

彼は大きなくもだ。

彼を見よ。

その身体を見よ。

その足を見よ。

その目を見よ。

彼の紡いだ網を見よ。

網に捕らえられたはえを見よ。

このくもについて書け。

あなたに彼がどのように見えるか言え。

あなたは彼を好きかどうかを言え。

捕らえられたはえについて考えることを述べよ。

この場合、絵と前半のことばとは、学習者各自の蜘蛛についての体験を想起させ、その時の印象を再現させる手がかりとなっている。それぞれの経験に基づく蜘蛛のイメージができてきたところで、後半のことばが示している手引に従って書くことになる。いわば、蜘蛛を題材とする時の、観察の着眼点とそれを文章にしていく視点や順序が与えられているのである。

<別表>

“Write away!” (第1段階～第4段階) における題材

1

2

3

4

	A	B	C	D		A	B	C	D		A	B	C	D						
	(a)	(b)	(c)	(d)	物 題 集	(a)	(b)	(c)	(d)	物 題 集	(a)	(b)	(c)	(d)						
	観 人	場 景	目 撃	音 声	語 考 見 索	観 人	場 景	目 撃	音 声	語 考 見 索	観 人	場 景	目 撃	音 声						
① くち	○				へび	○				生き物への私の思 ひ(りす、うさぎ、 かぶと虫、はえ)	○				自然の現象にみる 私の夢想	○				
② 海の底	○				町における雨の日	○				私の近隣の人々	○				私の運んだ肖像(絵 画)	○				私の運んだ肖像(絵 画)
③ 遠くの帆船を眺め ている男とその場 面	○				遠くのほろ馬車を 曳いている男とその 場面	○				宇田服を着た男と その場面	○				冬の寒い日、病室 の窓から双眼鏡で とらえた出来事	○				冬の寒い日、病室 の窓から双眼鏡で とらえた出来事
④ 生き物 (白鳥, りす, 猫)	○				ドラゴンのやっつて 来た(夏のおでこ 後, 本通りのこと)	○				動物園への訪問	○				何を考えるか ・楽しい、いやな、 効果的な 好きな	○				何を考えるか ・楽しい、いやな、 効果的な 好きな
⑤ フイルド・ウエス トにある町の主な 通りでの出来事	○				秋	○				私にとっての秋	○				夕暮れの私たちの 町の通り	○				夕暮れの私たちの 町の通り
⑥ 夕方, たき火のそ ばで (5 感覚で)	○				私の大嫌いなこと	○				私の好きなこと	○									
⑦ 校庭	○				私 (Maria) のほら 穴での冒険と歴史 的発見	○														
⑧ 私の教室からの眺 め	○				不運なタイムマシ ンでいる歴史的災 害の場にあぐり った時	○														

	1	2	3	4
17	私の家でおこった不思議な冒険(不思議の国のアリス)	私の数々の楽しみの中で最大のものは	驚かされたこと	私が祖父母の家で体験したこと
18	風	夜の狩猟家—ふくろう	火星への訪問 (25Cの探)	私の見つけた大木—ム(触覚)
19	私は夕方浜辺で迷子になった	古道具屋で私の見つけたたいへん価値のあるもの	私たちの教室	私がおなじく思っていること
20	私はほんとうに魔法女(?)に会った	空地の異なった様子(季節・時刻)(景観)	私はこの人のサイジンをこうして入手した	私(船員)は孤島におき去りにされた
21	テレビ	混雑する鉄道の駅	形(自然と人為、大小)	(高圧線用の)橋塔
22	海鏡	不運なめぐりあわせの出来事(片目のシャッタの木)	製薬会社に私の発明した機械を売りこむ手紙	私の会いたいと思っている3人の人物
23	夜の通り	(えものぞくく猫)空とぶ円盤の秘密	石炭と坑夫	ごみ(深刻な社会問題)
24	私の魔法の世界(ライオオンと魔法と衣装ダンス)		影(昼と夜)	1903年、ライオン兄弟が初めて飛んだ日のこと(1953年の時点での回想、—テレビ放送)
25	サーカス	私が選ぶ場所とその理由	私の趣味(理由)	火山
26	わが家	町かどの音	2つの異なった景色 所私の好きな景色	太陽と砂漠と人骨の墓から聴みとること

ここでは、学習者とはほぼ同年齢の子供の作例を示しながら、①の静態（外観）に加え、生き物の動きや見た場所（生息場所）をとり入れ、ことばによる生き物の活写を試みさせている。

動物の生態をとらえて描く分野での一つの到達が示されるのが、第一—⑩である。

猫族一般の特性（習性）を説明した上で、猫族中もつとも罍猛な「虎」について書くよう指示が与えられている。

猫は、単独で歩く。彼らは、友人が必要には見えない。家猫でさえも、人々にほとんど注意を払わないふりをする。彼らは、自尊心のある動物だ。これは、驚くことではない。なぜなら、狩猟するすべての動物の中でもつとも力のあるものは、猫族の仲間である。

野性では、犬やその親類は、一隊で狩をする。しかし、大きな猫は、一匹だけでも狩をする。

大きな猫の中で最大なのは、アフリカライオンであり、もつとも罍猛なのは虎だ。たぶんあなたは、動物園かあるいはテレビで虎を見たことがあるだろう。彼はあちこちと気短かに歩いていたか？彼は、育ちすぎた家猫のように、しかし、その燃える目で危険を常に油断なく警戒しながら、寝そべっていたか？

虎について、本が書かれてきた。詩も書かれてきた。人々は、虎を見た時、考えたことを書きたいと思ってきた。

あなたが虎を——動物園で、テレビで、あるいは、まさに本の中の絵で見た時、あなたは何を考えたか？

彼は、強く、優雅に、美しく、ぎよっとさせるように、大きく罍猛に見えたか？

虎について書け。

（獲物をさがして草原をうろつく虎の写真）

身近な動物、猫から猫族一般に及び、日常接する機会の少ない、しかし、動物園やテレビで見たり本で読んだりすることのある「虎」をとりあげて、巨視的にしかも自分なりの見解をもって述べさせる意図である。

このような野性の獣の性質に着眼しているのに、第二—⑩がある。猫族との共通点として罍猛さを持つ海の生き物「サメ」を題材にあげており、第一—⑩の応用、発展と考えることができる。

第二—⑩「ふくろう」は、第四—⑩「きつね」と対になって、夜の狩猟家としての視点からとりあげられている。

夜は静かだ。

森は暗い。

木々の下では、影が深く、

わらびや落ち葉を隠している。

せまい小道には、より深い影がある。

それは、ゆっくりと静かに動く。

枝の上には、小鳥たちが巢を作っている。

彼らは、そわそわと身動きしている。

彼らの中の一わから驚いた叫びがあがる。

落ちつかなさは、池に広がるさざ波のように広がっていく。
そして、それは遠くで消える。

いっそう深い影が再び動く。
きつねが通りすぎていく。

ここに描写された光景を想像することができるか？

写真を見て、もう一つの夜の狩猟家——ふくろうについて書け。きつねのように、ふくろうは、暗くなつてから、自分の獲物を探す。彼は、音をたてぬつばさで草原の上を飛びながら、野ねずみを狩る。

(第二—⑩ 暗闇で大きく翼を羽ばたいて、木から飛びたと) うとするふくろうの写真。

はじめに、夜の森の中のある場面の描写があり、この描写は、想定する世界への導入であると共に、学習者の表現のモデルでもある。

第四—⑪は、逆に、ふくろうについての描写が与えられ、「きつね」の場合を書かせている。

また、第二—⑩「獲物を探してうろうつく猫」は、ペットとして入にかわいがられる面と獣性をむき出しにして獲物を襲う面とを同時に合わせ持つ猫の二面性に気づかせ、特に裏面について書かせようとしている。

「動物」に題材を得る場合に、以上のような、動物の生熊、属性に主眼を置くものと、動物と人間との関わり（動物に寄せる私の思いや考え）に焦点をしばるものがある。

例えば、第三—①。

「くもは、みにくく、恐ろしい。彼らのことを考えると、実にぞっとする。」

ある少女がこう書いた。これからは、彼女がくもについてどう感じたかがただちにわかる。じゃ、これをみよう。

「私は、子猫が好きだ。たいいてい彼らは、やわらかくてだしめたくなるし、それに、いつもふざけたがる。」

これでも、書き手の子猫に対する感情について疑いはない。このページにある、生き物の写真を見よ。

それらの一つを選び、あなたが書くものを読む人に、あなたがそれに対してどのように感じたかがわかるように、それに書いて書け。あなたがそのように感じさせられるいくつかのことと言及せよ。例えば、へびのうろこのついた胴体やその冷たくまばたかぬ目。うさぎの絹のような毛やそのひくひくする鼻。

(りす、うさぎ、子犬、へび、かぶと虫、はえのそれぞれの) 写真。

理由を明らかにしながら、一つの生き物についての自分なりの感情や考えを第三者にわかるように表現しようというねらいである。

この系列に、第三—⑨「私の選ぶペットたち」、⑩「生き物の痛ましい窮状」があげられる。いずれも、動物の個々の特性を踏まえながら、人間との関わりかたをとらえ、動物への自己独自の思いや考えを育てて、それを表現することに重点がある。

さらに、その発展としては、第三—⑮「恐竜が集っていた時代」や第四—①「私の創造した生き物」が考えられる。

身近かな小動物から実際には容易に実物を見ることのできにくい野性の動物、古代生物、架空の生物まで、また、外観や印象から生態や特性をとらえたり、一つの動物の相反する二面性に気づかせたり、人間との関わりの中でとらえられてくる動物の姿に着目したり、想像力によって生物を創み出したり、実に多様なとりあげかたや展開が試みられている。

「動物」を題材として、一つは、生物学上の根拠を持って論理的に普遍していく方向と、もう一つは、自己の中に芽ばえてくる、人間以外の動物への興味や考えを基に、独自の世界を作り、対象とした動物の立場から人間やその生活をとらえなおしてみようとする方向とが、ここにはある。

A、(b)「人物」を中心とするもの

「人物」を最初とりあげているのは、第一—③であるが、ここでは、人物そのものを描くというよりは、一人の男と場面(明らかにある物語の中の)を提示し、それを解釈することで「物語」への発展を予想しているため、C、で考えたい。そうすると、第一・二段階では、第一—⑩のみである。

人々は、彼を「ポップキャンディマン」とよぶ。

彼は、巨大なポップキャンディを持っているように見える。

そのポップキャンディは、看板である。

それには、「止まれ、子供たち」とある。

ポップキャンディマンは、重要な仕事を持っている。

彼は、子供たちが道路を横切るのを助ける。

彼の看板は、往来に止まるように告げる。

そこで、子供たちは、安全に横切る。

あなたの学校の外には、ポップキャンディマンがいるか？

たぶん、ポップキャンディウーマンがいるだろう。

学校の横断の世話をする人について書け。

彼はどんなふうに見えるか？

彼はどのようなものを着ているか？

彼はどこに立っているか？

彼は、なぜ、たいへん重要な人か？

(学校の通りに、背の高さほどの看板を持って立っている)
ポップキャンディマンの写真。

子供たちの日常生活で身近かに働く人をとらえている。いつも見慣れ世話になりながら、改めてとりたてるには、埋もれやすい人物である。ポップキャンディマンの外見描写からその仕事の役割を考えさせようとしている。

ほとんど同じ視点から、第三—②、③が設けられている。②「働く人」では、少女の作例「庭師」をあげ、反対のページに示された四人の働く人の絵(庭師、ペンキ屋、花屋、駅の改札員)から一人を選んで、その人がまさに働いている場面(動きをとり入れる)を描写させる。③「石炭と坑夫」は、同じく社会で働く人ではあるが、第一—⑩、第三—②と違うのは、子供たちが日頃直接見る機会の少

ない人物とその仕事の内容を考えさせようとする点である。そのため、石炭や坑夫について、あらかじめ説明がなされる。石炭はどうしてできるか、今日の社会における重要（貴重）なエネルギー源としての意味、日夜、まっ暗な地下で生命の危機にさらされながら作業に従事する坑夫の姿等の説明や問題提起に、坑内で働いている坑夫の写真が加えられ、学習者なりの考えをまとめて書く手がかりが与えられる。ここでは、職業や労働内容についての説明や意見を書くことにねらいがおかれ、社会性をいっそう強めた角度からの題材のとり扱いである。

働く人ではないが、第四―②「私の隣人たち」も、毎日接する人々をとりあげ、どんな種類（静かな、騒々しい、沈んだ、陽気な、常に最上を望む、常に最悪を恐れる、等）かを描写しながら、人のありかたを考えさせようとする。

また、学習者自身にとって魅力ある人物をとらえていくものに、第三―⑩、第四―⑩がある。第三―⑩は、著名な人々の署名を収集する趣味があると指摘し、今日の有名人七名（女優、歌手、バレリーナ、スポーツ選手、小説家、政治家等）の写真から一人を選び、その人の署名をどうして入手するかを述べさせる。第四―⑩は、次のようになっている。

競争試験では、あらゆる地方からの子供たちは、次のことについて書くよう求められた。

私がおっとも会いたいと思っている三人の人物。
写真は、第一位と二位の賞を獲得した人々から選ばれた人た

ちを示す。

あなたがもっとも会いたいと思っている三人の人物について書け。

あなたが、なぜ、これらの人物に会いたいと思うのかを述べよ。

そう、あなたがほんとうにその人物に会いたいならば、このページにある写真のどれかを選んでよい。

あなたが会いたいのなら、すでに死んでいる人を選んでよい。

（ピカソをはじめとする各界の人物六人の写真。）

自分がどのような人物に関心を持っているかを自覚していく中に、自分なり人間観が形成され、やがては将来への理想像が描かれていくのである。身近かに働く人から、今日各界に活躍する人、古今東西を問わず自分が強い関心を抱く人まで、人物への目が徐々に遠く大きく開かれていくような配慮がなされている。しかも、主に職業と関連づけて人物がとりあげられるのも一つの特徴である。

ここでは、「人物」とくるとすぐに生まれやすい家族（両親、兄弟姉妹）、先生、友人等が含まれていない。子供にはあまりにも密接に関わりすぎるため、まだ十分に対象化しきれないという判断なのである。

「人物」像については、日常生活では社会的視点から、そして後で述べる物語のある状況下で設定される人間の心理・言動等を描くという虚構的視点から探究されている。

B、「場面」等を中心とするもの

このB、は、他のA、C、D、と異なり、B、自体を目的とするというよりは、場面や事物の描写方法・力を習得しながら（主に第一・二段階）、やがて、C、「物語」やD、「意見・思索」文に発展（応用）させる（主に第三・四段階）ことを目ざしている。したがって、ここでは、日常生活に埋もれている場面や事物への着眼のしかたと描写のしかたをどう学ばせようとしているかを中心に考えてみたい。

まず、第一—⑥で、基本の考えが示される。

私たちは五つの感覚——見る、さわる、味わう、におう、聞く——を持っている。私たちが物事の印象を受けるのは、これらの感覚を通してである。私たちが何かを、いつかを、あるいは、どこかを思い出す時、私たちは、私たちの感覚の一つに残されたその印象をよびおこすのかもしれない。もし、たくさんのにおいをただよわせている花が咲いている庭を訪れたなら、そのにおいをおぼえているのかもしれない。もし、風のある日に海辺に立っていたのなら、唇に（ついた）塩の味わいをおぼえているのかもしれない。もし、おもしろい定期市でいくらかの時間を過ごしたなら、音楽の音や売店の持ち主たちが叫んでいる声をおぼえているのかもしれない。もし、花火をうちあげに行つたなら、花火の燃えている光景をおぼえているのかもしれない。もし、これまでにシヤム猫のこ毛をなでたことがあつたなら、そのなめらかでやわらかい感じをおぼえているのかもしれない。

あなたが絵の中の男といっしょにいると想像せよ。

夕方、その火のそばにあなたが立っている時、それがどんなに見えるかを書け。

あなたは、何を見、感じ、さわり、におい、聞くか？

（夕方、一人の男がたき火をしている写真。）

印象の基となる五感覚からとらえられるものを具体的に一つの場面を書きとらせようとしている。これに加えて、第一—⑧「私の寝室からの眺め」では、一人の少女が窓から外を眺めている写真と「私が私の部屋の窓から高く見上げる時、幾百という屋根のてっぺんが空へのびている……」に始まる場面設定の簡単なことばによる描写とが与えられ、「あなたがあなたの寝室の窓から外をのぞいた時、何が見えるか？」以下予想される「見えるもの」の列举が疑問形でなされた最後に、「あなたが見ているいくつかの家々で何がおこっているか、あなたは知っているか？」という問いかけがなされる。実際に見えるものを書き並べるだけでなく、それらを通して想像されてくる人間の生活に目を向けさせようとしているのである。

聴覚のみをとり出して練磨しようとするものもいくつかある。
第一—⑭。

あなたは、夏の日に、あなたのまわりから異なった音の聞こえてくる草地にすわつたことがあるか？どれくらい多くをあなたは聞くことができるか？離れた道路の自動車の騒音や隣りの畑のトラクターの音のことをいっているのではなく、生きてい

るものたちによって作られている自然の音のことである。

野ねずみのさらさらという音やチューチュー鳴く声、ひばりのさえずる声、草の中の数えきれぬ蜂のささやきがある。

(中略)

あなたがどこにいようと、ふつうの音が聞こえてくる。あなたがあなたの家の前の戸外に、朝、午後、夜に立っていると想像せよ。

あなたには、どんな音が聞こえてくるか？

これらの異なったそれぞれの時刻の音について書け。

(町の通りの様々な物音をやや誇張した絵。)

聞きのがしやすしい日常の物音を意識してとらえさせようとする。

同じねらいのものに、第二一〇「町かどの音」、第三一〇「好きな音」がある。第三一〇は、「音」論に近い。

触覚に関するもの(第三一〇)「手は触れるためにある」、第四一〇「私の見つけた大木とそれで遊んだゲーム」や嗅覚に関するもの(第四一〇)「私が連想する匂い」もあるが、全体としては、一つの設定された場面で学習者が自分の経験を思いおこしながら五感からの印象をまとめて書いていくものが多い。

どう書くかについては、例えば、第二一〇の場合、次のようである。

ほら穴の避難所から、私は雨を眺めた。どんよりした灰色の空からたえまなく霧雨が降ってきた。雨は遠くにある海を隠し、私は、浜辺近くの水を見ることができただけで、水面にはねる雨だれを眺めていた。(中略)ほら穴の中は、冷たくじめじめしていた。私は、雨がやんで家に帰れるようになるのを願った。

これは、海辺での雨の日のことばによる絵(描写)である。筆者が見たこと聞いたこと、湿気や寒さのように感じたことについて述べていることに注意せよ。

町における雨の日について書け。

(霧雨にけふる街路の風景。)

雨の日の描写で、海辺の場合のモデルを示し、街の場合を学習者に試みさせようとしている。

戸外だけでなく、建物の内側を描くものに第二一〇「ある店の内部」や第四一〇「町のもっとも古い狭い通りにある売店に入って」などがある。第二一〇では、靴の修理店の描写例を示し、スーパー、食料品店、果物店、パン屋、本屋等の写真からどの店かを選び、描写をさせる。第四一〇は、日頃目につきにくい(日々の生活には直接関与らない)店をとりあげ描写させる。

また、第二一〇は、内部描写を兼ねながら「博物館」の役割や考古学の存在に気づかせ、説明、意見文に発展させようとしている。

こみやがらくた(第二一〇)、一般に見落されやすいもの(第三一

⑩に目をつけて、新たな価値を見つけよう(第二―⑨)という姿勢も強い。ひいては、それが、第三―⑧「古きものと新しきもの」や第四―⑩「私は石器時代のニューギニアからやって来て初めて文明の乗物を見た」、⑪「深刻な社会問題のごみ」、⑫「自動車の世界」などの意見、評論文に発展していくことになる。

着眼のしかたとしては、同一場所の時刻や季節による違いをとりあげたもの(第一―⑦⑭⑯、第二―⑱、第三―⑲)、類似のものとして、第一―⑳「夜の通り」、㉑「にぎやかな通りでの光景」、第四―㉒「夕暮れの私たちの町の通り」が指摘できる。あるいは、対照的な場所をとらえる、第二―㉓、第三―㉔がある。

比較法、特に「対」のとらえかたが重視されている。事物の把握をする場合、また、自分の感想や意見の整理をする場合に有効な発想法の一つである。例えば、第二―㉕「太陽の人間に及ぼす二つの面―功罪」、㉖「私が選んだ二冊の本―好きになれそうにない本」、第三―㉗「形(自然と人為、大小)」、㉘「影(昼と夜)」、㉙「古きものと新しきもの」、第四―㉚「私の選ぶ肖像―写真と印象―」などがそうである。

さらに、自然の現象や事物をそのまま描写するのではなく、外界の事象に伴ってわきおこる心の内の思い、夢想をとらえ表現しようとするものがある。第四―㉛。

雨

私は、ある日、Cardiffにある私たちの新しい家の窓のそばで不思議に思いながらすわっていた時、何か全く新しいことに

気づいた。雨が窓をやさしく伝って地面に軽やかに落ちていた、

と突然、風がやってきた。もちろん、私は、以前に何度も雨を見たことがあった。だが、おもしろいのは、この特別の日に、それが何か全く違っていったことだった。それは、まさにダンスを学んでいる多くの踊っている少女たちようだった。

(中略)

パレリーナになりたいと日頃夢中になって願っていた一少女(一〇歳)が雨の日の幻想を描いた作例である。

あなたは、これまでにこのような白日夢をみたことはないか？

あなたは、これまで夏の日に、雲の不思議な形に気づいて、それらが語ってくれる物語を推量したことはないか？

(また)これまで、池の上に霧がかかり、しだいに暗くなっていくのを見て、それぞれの渦巻くかたまりを生きている生物だと思ったことはないか？

このような光景とあなたの心に浮かんだ夢想を描写せよ。

(窓の内からガラスに伝う雨滴を眺めている少女。夏空の雲。池上に渦巻く霧。以上三枚の写真。)

思いの内容は異なるが、ある場面の瞬時の気持をとらえようとすることは、第一―㉜「私はほんとうに魔女(?)に会った」、㉝「私が冬の暗闇で公園を通り抜けた時の衝撃」第三―㉞「驚かされたこ

と」等で、やや近いものに、第四一⑦「私の悪夢」があげられるであらう。

C、「物語」を中心とするもの

「物語」を書く場合、一つの場面(状況)や出来事の発端を与えられて、その後のストーリーを展開していく力と、与えられた場面における自分の位置によって登場人物像をその心理や言動を通し鮮明に描出していく力が要求され、どちらも想像力を必要とすることはいうまでもない。

第一〜四段階の第三練習が共通して、一人の男とその様子から推察する場面(明らかに物語中の)を語らせようとしている。

絵の中で、この男は誰か？

起こった場面はどこか？

遠くにいる船は誰の？

その船は、陸地に向かって航行しているのか、あるいは、離れていこうとしているのか？

その男とこの場面について書け。

あなたが書くものの中では、あなたは、

(a) その男 か、

(b) その男の友人 か、あるいは、

(c) その男の敵かもしれない。

(遠くの帆船を眺めている男とその場面。)

第二一⑧では、この(a)と(c)に(d)「単なる物語の語り手」という視点が加わる。第三、四の⑧には、特に、男の気持や考えをいろいろ推定させる観点が示されている。学習者がその男に對しどういう位置を占めるかによって、その場面の解釈が変わってくる。物語を作る際に学習者の視点を設定(選択)させるやりかたは、この教科書では一貫したものである。

第一一⑤⑩、第二一⑦⑧、第三一⑫、第四一⑭は、いずれも歴史的事実に基づきながら、学習者を設定した場面の登場人物にならせてその歴史的事件を再現し物語化による体験をさせようとい意図している。中で異色なのは、第二一⑧と第四一⑭である。

第二一⑧は、不運なタイムマシーンを持つているとの仮定のもとに、それが世界的大災害の起こった場面(七九年「ベスピオ火山によるポンペイの滅亡」から一九六六年「イタリーのフロレンスでの洪水」までの五大災害に二〇一〇年「？」が加えられている)にあなたを連れていったとすると、「それは、どんなふうだったかを描写せよ。あなたは、どうやって逃げだしたかを述べよ。」という指示が与えられている。また、第四一⑭は、一九〇三年ライト兄弟が初めて飛んだ日のことを、一九五三年の時点で回想しテレビ放送をするよう求められる。

空想に基づくものも多く用いられている。

第一一⑩では、「不思議の国のアリス」を用いて、アリスがびんの中の液体を飲んだため体がぐんぐん小さくなっていく場面の描写をそのまま引用した上で、次のような手順が示される。

(前略) あなたに、このような何かがおこったと想像せよ。
だが、あなたはアリスのようにうさぎ穴に落ちるのではない。

あなたは自分の家にいる。

あなたがまわりを見た時、あなたの気持を述べよ。

そして、その魔力がしだいにうせる前に、あなたにふりかか
った冒険について描写せよ。

(台所の机の下で猫にすくめられている小さな男の子の絵。)

熟知した自分の家の中に限定することにより、豆粒ほどになった
目であらゆる事物をとらえなおさせようというのである。視点転換
による事物の再認識をはかったものと言える。

また、第一一〇は、「ナルニア物語」の「ライオンと魔女と衣装
タンス」の中で子供たちが魔法の世界を見つけた場面を引用し、そ
れを見習って自己の世界を想案させようとしている。第二一四、
第三一〇も空想の世界を楽しむ種類である。

第二一〇は、推理物語で、「三月二十四日の朝八時三〇分に、
Southshire にて Eve Manson 村の警察に、Sinclair Wade 氏が

なくなつたという知らせがあつた。Wade 氏は、有名な大きな獲物
の狩猟家であり世界の旅行家であつた。……(以下略)」と始まる
やや長い冒頭(状況設定)が与えられ、Wade 氏に何が起つたか
を推理し、物語を展開する。同様なのが、第四一〇

この外、SF じたてのものが、第一一〇、第二一〇、第三一〇等、
怪奇ものに、第二一〇、第三一〇、第四一〇、日常の出来事を取り

あげたのが、第四一〇、第四一〇、〇は、ある特別な状況が与えら
れ、その当事者の心情から後の展開を試みるものである。

第二段階第三〇練習では、四コマの絵で起承転結を示し、物語の
構成法を学ばせようとしている点が注目される。

第三段階から第四段階になるにしたがい、長々とした状況が提示
され、それに続けて物語を作るやりかたがふえているのが一つの
特徴である。

D、「感想・意見・思索」を中心とするもの

いろいろな題材に簡単な感想を添えながら、あるいは、自分の興
味(好き、嫌い、おもしろい等)の内実を少しづつはつきりさせな
がら、感想文は、大きく二つの系列に発展していく。一つは、論理
を中心に展開させる「意見(↓評論)文」へ、もう一つは、イメー
ジの展開を重視する「思索(↓随想)文」へ。前者の一つの例とし
て、第二一〇があげられる。

あなたは、反対のページに示されている本(九冊)の中から
どれか二冊を選んでよい。

あなたが選んだ本について書け。なぜそれらを選んだかを述
べよ。

それから、すべての中でちっとも好きになれそうにない本に
ついて、それを好きになれないのはなぜか——あるいは、むしろ、
なぜそれを好きになれないと思うのかについて述べよ。

あなたは、その本を多少とも読むまでは、本を読むのが嫌い

だとはほんとうにはけっして知らないのではないか？

(九冊の本の写真。)

後者の代表例として、まず第一⑩がある。

わが家とは何？

辞書には、こうある、

わが家…だれかが住むところ

しかし、わが家はそれ以上のものではないのか？

わが家は、れんがとしくいか？

わが家は、家具か？

それは、おとうさんとおかあさんと

兄弟と姉妹とか？

それは、冬の日の明るい火、

そして、夏の午後の芝生での戯れか？

あなたにとってわが家とは何？

あなたはホームシックにかかるとどうするか？

なぜ？

題目を書け

わが家

そして、それについて書け。

(れんが造りの家の絵)

小学校低学年児童に与えられる題材としては、かなり抽象的で難

解に思われる。

この系列をしめくくるのが、第四⑪である。

(太陽が照りつける砂漠に人骨がころがっている絵)

絵を見よ。

何についてか？

砂漠？

太陽の力か？

私たちは水無しでは生きることができないという事実か？

自然との闘いにおける人類の弱さか？

極限に至るまで戦った人間の勇敢さか？

絵の男は誰か？

彼が誰かということが問題か？

絵を見よ。

これについて考えよ。

それから、あなたの心に浮かぶ考えを何でもどんどん書け。

一枚の絵の様々な解釈が提示されている。それらを参考にして、学習者は、自分なりにイメージや考えを思いきり拡散させた上で、どのような視点からでも探究していくことができる。第一⑪がことばの解釈をめぐるのとやはり対になって組まれているものであろう。

全体を概観すると、第一段階では、具体的なものの的確な描写を

中心にして様々な視点のきりかえを試み、想像の楽しさを味わいながら、少しずつ自分の思いや考えをひき出しかけている。視点の転換には、例えば、②で海藻をいろいろな他のものにみたり、③④のように「私」がそのものになってみたりすることも入る。

第二段階では、一つのもの二面性、あるいは「対」の観念を中心にした着眼や描写のしかたを学ぶと共に、自分の思いを耕やし意見をもちはじめの時期と考えられる。ここまでで習得した基礎技能を、次の段階から応用していくことになる。

第三段階は、まさに「転」の時期にあたり、それまでの対象にできるだけ忠実に即す描写法から、今度は、自分の思いや考えを軸にして描写・叙述し、その対象も具象的なものから抽象的なものになってくる。

最後の第四段階では、一語作文と状況作文にその特徴を見ることが出来る。前者は、自己の問題意識を中心に意見を論述していくことを目ざし、後者は、一つの文脈・状況の中で、それまでの段階で身につけた思考認識法・描写力を駆使して、登場人物（↓自己）のありかたや事件の展開と終結を決定していくことを意図していると考えることが出来る。

第一段階から第四段階までの課程は、部分的要素的練習が積み上げられ、しだいに物語や意見文・思索文へと集約（完成）されていく過程でもある。

四、作文教材の意義・役割

“Write away”から考えられる、作文教材の意義・役割を四点

あげておきたい。

1、表現したい題材の発掘と提示

この教科書でもっとも苦心されていた点である。毎日の生活の中で何を表現材料として用意するか、つまり、日常生活で何を表現していくかは、教師にも学習者にも一つの大きな課題である。ここに示された一二〇の題材は、学習者にまず表現への興味や意欲をかきたてしかも書くに価すると判断されたものである。一つ一つの題材が単発的のようでありながら、全体で見ると前後の関連を持って「そこ」に位置づけられていることに気づく。現実の直接経験をこぼでとらえ対象化させていく題材と、心中の様々な思いや飛躍的なイメージの開発にも十分配慮された題材とが四段階の見通しのもとに配されている。

ここでの絵は、必ずしも美術的巧みさや写実性を要求しない。学習者の経験から何かを想起させ新たなイメージを作り出す余地のあることが大事である。

2、「私」の視点設定と対象への着眼のしかた

「私」の位置が重視されていて、特に「物語」の場合は、登場人物に一体化することもあれば、観察者、語り手（作者）になって全体を大きく客観視することもある。どういう立場から書くかということは、書き手という主体の形成において、きわめて大事な問題である。

それはまた、対象への着眼のしかたにも関わる。絵も漠然と見せ

るのではなく、焦点をしばらく自己の意見や世界がどうしたら形成されるかを具体的に指示している点でもある。何でもないある場や事物もとりあげた一つで、実に鮮やかな印象を与える表現対象になりうる。題材を真に値うちのあるものにしていくのも、この着眼のしかたによる。

3、適切な（優れた）具体的な表現の見本

せつかくの値うちのある内容も未熟な表現にいきとまっている限り、第三者に的確に意図を理解してもらうことができない。内容を耕やすと共に、表現そのものをみがき鍛え伸ばしていくことも作文の学習指導の一つの目標である。

この教科書には、場に応じ、優れた詩や散文（物語、随筆等）がモデルとして示され、学習者はそれを参考にしながら、類似の場面の描写（表現）を試みることになる。

4、書く手順・方法

初めは、指示された手引どおり書けばよく、しだいに要領がわかってくるにつれ、自分なりに書こうとする内容に合わせていくつかの中から選択し工夫しながら書いていくように配慮されている。

1、と2、とは、学習者の興味を開拓し、内在するものを外化させ、イメージを形成しつつ感想・意見を育てていくことになる。その際、個人による選択の余地を残し、学習者独自の探索がなされるためには、題材そのものが考える具体的な手がかり（枠）を持ちな

がらも幅と深さを備えていることが必要になってくる。

3、と4、とは、1、と2、を実際に文章化し作品として仕上げるときに関わることがらで、ここでは、いくつかの型を模倣することによって習得していく過程での役割である。

この教科書では、まずは一つの場を与えることで、学習者を触発し自然と何かを書かずにはおれない状態に立たせようとしており、あえて順番やねらいを記さぬことで、教師による独自の活用をも配慮（期待？）しているのである。

これが実践の現場でどう用いられ、学習者自身に実質、どのように生かされていくかは、今後の課題である。

〔京都教育大学助教授〕